

第二回企画展
富士山世界文化遺産登録記念特別企画
ドキュメンタリー富士

富士山は、世界で最も多く被写体になっている山であり、これまでさまざまな富士が生み出されてきました。本展では、浮世絵を江戸時代のドキュメンタリーとして捉え、名所絵師として名を馳せた歌川広重晩年の作『富士三十六景』『不二三十六景』と、浮世絵に魅せられたイギリス人写真家クリス・ステイール『パークインズの「富士40景」』をご紹介します。

Exhibition Celebrating Mt. Fuji's Registration as a World Heritage Site
Documentary FUJI

2013.7.17.Wed- 9.16.Mon

第2回企画展 富士山世界文化遺産登録記念特別企画

ドキュメンタリー富士

2013年7月17日(水) - 9月16日(月・祝)

展覧会名：ドキュメンタリー富士

会 期：2013年7月17日（水）－9月16日（月・祝）

Part 1 / 2013年7月17日（水）－8月11日（日）

Part 2 / 2013年8月13日（火）－9月16日（月・祝）

主 催：静岡市東海道広重美術館（指定管理：NPO法人ヘキサプロジェクト）

協 力：  JAPAN AIRLINES



富士山は、古来より「信仰の対象」「名山としての景観」「芸術の源泉」として、世界的に知られており、人々はその山にそれぞれの思いを託してきました。同時に、富士山は世界で最も多く被写体になっている山でもあり、これまでさまざまな富士が生み出されてきました。本展では、浮世絵を江戸時代のドキュメンタリーとして捉え、風景画の巨匠、歌川広重晩年の作『富士三十六景』『不二三十六景』と、浮世絵に魅せられたイギリス人写真家クリス・スティール＝パーキンスの「富士40景」をご紹介します。カメラワークを思わせる近代的で写真的な構図で富士山を、時には主題として、しかし主に江戸庶民の生活の一存在としてリアルに捉えた広重と、富士山をあくまで一つの焦点として用い、そこから日本社会を捉えようとするパーキンス。日常のさりげない風景の中に見出された一瞬が、時代を超え、国を超え、浮世絵と写真というその時代に即したメディアで残され続けています。さて、日本人の生活の中で富士山の果たす役割は、江戸時代から現在でどのように変化してきたのでしょうか？その変化は江戸時代以降の現代の日本社会の大きな変化を明確に写しているに違いありません。

◎出品作品

※ 展示内容及び出展作品は都合により変更となる場合がございます。

歌川広重

Part.1 『富士三十六景』 31点（目録含む）

『本朝名所 薩多富士』 1点

『本町名所 駿州富士川渡船之図』 1点

『鎌倉七里ヶ浜風景』 1点

『幼童行列道中之図』 3点（続物）

計37点

Part.2 『不二三十六景』 28点

『東海道五十三次之内』（蔦屋版）6点

『東海道川尽 大井川の圖』 3点（続物）

計37点

クリス・スティール＝パーキンス

Part.1/2 『富士40景』 40点

計40点

歌川広重

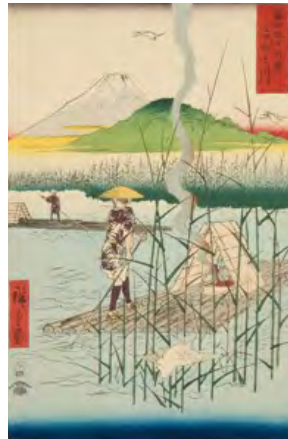
『富士三十六景』

富士三十六景は豎大判の錦絵で、広重が没する安政五年（1858）に版下絵が制作され、翌年に版元葛屋吉蔵から出版されました。豎長の画面を生かすために俯瞰図法を用い奥行を広く取って遠近感を出したり、近景のモチーフを拡大して描く「近像型構図」を用いた画面構成が斬新な作品です。



駿河薩夕之海上

薩埵峠(さつたとうげ)の岩にぶつかる大波とその間から見える富士山を描いており、覆い被さるかのような波の形は北斎の「富嶽三十六景神奈川沖浪裏」を彷彿とさせます。



さがみ川

浮世絵の収集家でもあったゴッホが「タンギー爺さん」の背景の壁に描いた絵の一枚として有名な作品です。相模川を下る筏師を背後から大きく捉え、遠近感を強調しています。



武蔵小金井

桜の幹を大胆に画面の手前に配し、その幹の洞(うろ)から富士山を覗き見る構図が面白い作品です。手前から奥へカーブを描く玉川の流れが遠近感をより感じさせます。

『不二三十六景』

不二三十六景は広重が描いた最初の富士三十六景シリーズで、嘉永五年（1852）頃、版元佐野屋喜兵衛から刊行されました。大きさは横中判で『富士三十六景』のちょうど半分です。広重の横絵作品には珍しく「東都両國橋下」や「駿河田子の浦」において「近像型構図」が用いられ、晩年の画風変遷を辿るうえで重要な作品です。



東都両國橋下

両國橋真下の橋脚の間から対岸を望む構図によって、鑑賞者はあたかも隅田川を舟に乗って橋の下を通り過ぎるかのような体験をすることができます。



駿河田子の浦

中央の鋭角的な網干(あぼし)は、遠景のゆるやかな富士の稜線と対照を成しています。三角形の網干や同心円状の波などほとんどのモチーフが幾何学的に表現されています。



相模七里か濱風波

激しくうねる波の間からと江の島の左半分と小動(こゆるぎ)岬が顔を出しています。浜が手前に描かれていないので、鑑賞者に海上にいるような錯覚を起こさせます。



伊豆の海濱

波に削り取られてできた奇妙な形の岩の洞穴から富士を覗き見る奇抜な構図ですが、存在感の強い岩とおぼろげな遠景の富士のコントラストが風景にリアリティを与えています。

クリス・スティー爾=パーキンス

『富士40景』

浮世絵に魅せられたイギリス人写真家クリス・スティー爾=パーキンスの「ドキュメンタリー富士山」

歌川広重や葛飾北斎の浮世絵は、今日のソーシャルドキュメンタリー写真のような役割を担っており、われわれが暮らす世界について様々なことを語りかけてくれます。外国人からの視点と、ドキュメンタリー写真家として広重や北斎がそうしたように、富士山を、時には主題として、しかし主に現代生活の一存在とし、現代の日本社会を捉えます。



© Chris Steele-Perkins / Magnum Photos

昔から変わらないものと大きく変化していくものが富士山を取り巻く現状であり、そのコントラストこそパーキンスが写真を撮りたいと思った動機である。この作品は富士山の周りで日々変化していくものを捉えた1枚。山梨県河口湖近くの道路工事現場。1999年。



© Chris Steele-Perkins / Magnum Photos

富士宮と御殿場のあいだあたり、野球の練習。2001年。



© Chris Steele-Perkins / Magnum Photos

河口湖近辺。温泉の窓ガラスに写った富士山。1999年。



© Chris Steele-Perkins / Magnum Photos

白糸の滝付近のガソリンスタンド。2001年。

作家コメント

1997年、私は将来私の妻となるべき一人の日本人女性に出会いました。この素晴らしい女性を生み出した国について、もっと知りたいという願望から、この写真シリーズをやってみようと思った。でも、このプロジェクト、一体どうなっていくんでしょう？

多くの西洋人と同様に、私は浮世絵の中で、特に北斎と広重に興味を持ちました。その美しさもさることながら、彼らの作品には、圧倒的なドキュメンタリー性がありました。二世紀以上前の人々の当時の暮らし、感覚、手触りやエネルギーを褒めたたえているようでした。二人が制作した富士山からインスピレーションを得た作品には本当に惚れ込みました。富士山という主題を背景に押しやったり、時には、ほとんど隠してしまいましたが、それでもなお、富士山は絶えず人々のさまざまな暮らしを見守っています。

それと同時に、現代の日本の写真家が撮った、多くの富士山の写真を見ましたが、彼らがとりとめも無い美を追求しているようで驚きました。早朝の朝日と富士山、とぎれた霧の中から顔を見せた富士山、神秘的な雲の冠をかぶった富士山、桜の花や金色の葉と並置した富士山、などなど。それは、まるで、現代の混沌とした現実から富士山を救出しているかのようでした。このアプローチに同情はできるかもしれませんが、「汚れなき美」を夢見て、、、でも、それは、結局、現実を否定していることになるでしょう。

経験を積むに従って、私の驚きはますます膨れ上がっていきました。ほとんどの外人さんたちと同様、私が最初に富士山を見たのは、東京から京都に向かう新幹線の中からでした。それは、「汚れなき美」ではなかったのです。車窓から富士山が見えるようになってくると、人々は車両を移動し、窓から富士山を指差し、うなずきました。富士山は、家並みの海から現れたり、トラックや乗用車で混雑した道路ネットワークから現れたり、はたまた、綿々の煙突から吹き上がる煙や蒸気の背後で漂い、電気の鉄塔がフラッシュしていました。これこそが、まさにリアルな現代社会と言えるでしょう。そして、距離をおいて、富士山があるのです。そして、今もなお変わることなく、私たちの生活の豊かな積み重ねを見守ってくれています。こんな富士山の景色を、北斎や広重はどう捉えるのでしょうか？きっとワクワクしたに違いありません。

ここにこそ、私のプロジェクトがあったのです。そこで、富士山を通じて、富士山を取り囲む人々の暮らしを通じて、日本を探検することになりました。季節を通して訪問し、登ったり、呼吸したり、写真に撮ってみようと思ったのです。ドキュメンタリー写真家としての自分の目を頼りに、自分の本能を追いかけてみよう。それには、あの浮世絵の師匠たちの鍵となるもの「富士山」に敬意を払いそれをお借りしなければ。全ての私の写真には、様々なかたちの富士山が共通して登場します。日本が私の題材であり、富士山は私のガイドなのです。

クリス・スティーラー＝パーキンス

作家プロフィール

クリス・スティーラー＝パーキンス

Chris Steele-Perkins

マグナム・フォト所属

1947年7月28日ビルマに生まれ、1949年イギリスに移住。

2つの大学で化学と心理学を学ぶ。在学中から学生新聞の写真家兼ピクチャーエディターとして働き、1971年ロンドンに移りフリーランスとして活動を開始する。1973年にバングラディッシュを長期取材するが、基本的には活動の拠点をイギリスにおき、都市部に潜む貧困やサブカルチャーなどをテーマに活動する。1979年に初めての写真集「The Teds」を出版。イギリス美術協会が出版する写真集の編集も手掛ける。1979年からマグナムに参加、83年より正会員。イギリス国内の他にアフリカ、中南米、レバノンなど世界各地の紛争地や社会情勢などの取材を始め、1988年オスカー・バルナック賞と英国で最も優秀なフォトジャーナリストにおくられるトム・ホプキンソン賞を受賞、1989年にはロバート・キャパ賞受賞する。1992年には4年をかけてアフガニスタン取材し、写真集「アフガニスタン」にまとめる。

日本人と結婚してからは日本を頻繁に訪れ「FUJI」(2000年Umbrage社)、「TOKYO LOVE HELLO」(2006年)など、日本の写真集を出版する。その他の写真集に、2000年から2001年にかけての心象風景を綴った「ECHOES」(2004年Trolley社)、イギリスDurhamのカントリーライフ取材した「NorthernExposures」(2007年)などがある。

<http://www.chrissteeleperkins.com>

受賞歴

1988年 オスカー・バルナック賞

1988年 トム・ホプキンソン賞

1989年 ロバート・キャパ賞ゴールドメダル

2000年 ワールドプレスフォト賞

2008年 テレンス・ドノヴァン賞

マグナム・フォトとは

1947年、ロバート・キャパ(ハンガリー人)の発案で、アンリ・カルティエ＝ブレッソン(フランス人)、ジョージ・ロジャー(イギリス人)、デビッド・シーモア("シム") (ポーランド人)らが創設した、世界を代表する写真家のグループ。写真家の権利と自由を守り、主張することを目的として、ニューヨークとパリに事務所が設置された。様々な国のそれぞれに違った生活環境を持つ優秀な写真家たちが集まり、自らの情熱や興味を赴くままに、自分の好きな写真を撮り続けている。現在ではメンバーの数も50名を越え、ロンドンと東京にも支社を置き、ドキュメンタリーだけでなく、コマーシャル、ファッション、コーポレートなど、様々な分野で、グローバルな活動を続けている。2007年4月17日、創設60周年を迎えた。

<http://www.magnumphotos.co.jp/>

□ 関連企画 - 1

 トークイベント 「外国人ドキュメンタリー写真家から見る富士山 - もうひとつの顔」
 クリス・スティーレル＝パーキンス

日 時: 7月27日(土) 13:00～14:30

[参加費] 無料 ※入館料別途

[定員] 40名(事前申し込み/先着順 ※定員になり次第受付を終了します)

[お申込み] 静岡市東海道広重美術館

お電話 054-375-4454(代) または、当館ウェブサイトの申込みフォーム(下記URL)よりお申込みください。

<https://tokaido-hiroshige.jp/inquiry/>

□ 関連企画 - 2

写真コンテスト 『GREAT MOUNTAIN FUJI / 富士山「じぶん」遺産』

あなたの日常の生活の中には、どんな「富士山」がありますか? 自宅のお風呂場やトイレの窓、通勤電車やバスの車中から見る富士山、いつも立ち寄るコンビニや犬の散歩道で見る富士山…などなど、いつものあたり前の風景こそが、あなた自身の記憶の遺産になるかもしれません。そんな「富士山「じぶん」遺産」写真を募集します。あなたのためだけの富士山の写真をお寄せ下さい。選出作品は、Part2会期中 当館エントランスホールにて展示を行います。

応募概要

応募開始日: 2013年7月17日(水)

応募締切日: 2013年8月11日(日) 必着

応募資格: プロ・アマ・年齢・性別・国籍 問わず (18歳未満の方は保護者の同意が必要)

応募規定: 応募者本人が撮影した未発表作品で、応募者が著作権を有するもの(他のコンテストへの発表、また発表予定のないもの)
 使用機材はデジタル・フィルムいずれも可。カラー・モノクロ問わず。
 画像の合成及び加工可。応募作品及びデータの返却不可。

応募作品 オンラインでのご応募/1作品 3MB以内、JPEG形式

郵送でのご応募/四つ切のプリント作品

応募点数 おひとり3点まで

応募方法 ・オンラインでのご応募/専用応募フォームより応募

・郵送でのご応募/ 作品票(公式サイトよりダウンロード)を作品裏面に貼付の上、郵送にて応募

審査員 写真家/クリス・スティーレル＝パーキンス(マグナム・フォト)

静岡市東海道広重美術館 館長/久米英之 主席学芸員/大森久美

受賞者発表 2013年8月下旬 予定(当館エントランスホール及びウェブサイトにて発表)

賞及び副賞 当館での写真展開催 及び 以下賞品

[最優秀賞] 1名/QUOカード3万円分 [優秀賞] 2名/QUOカード1万円分 [入選] 3名/QUOカード5千円分
 他 [特別賞] 4名/副賞

入賞作品展 静岡市東海道広重美術館 エントランスホール [2013年9月3日(火)～9月16日(月・祝)]

問い合わせ 静岡市東海道広重美術館 〒421-3103 静岡市清水区由比297-1 TEL:054-375-4454 FAX:054-375-5321

詳細は写真コンテスト 特設ページ <http://www.tokaido-hiroshige.jp/fujisan/>

□ 広報用画像提供のご案内

展覧会広報用として下記3点の作品画像(デジタルデータ)をご用意しております。

ご希望の場合はメールまたはファックスにてお申し込みください。(次ページ記載のご使用条件を必ずお読みください)



© Shizuoka Tokaido Hiroshige Museum of Art



歌川広重
『富士三十六景 駿河薩夕之海上』
静岡市東海道広重美術館 蔵



クリス・スティール=パーキンス
『富士40景』
© Chris Steele-Perkins / Magnum Photos

開館時間：午前9時～午後5時(入館は閉館の30分前まで)

休館日：毎週月曜日(前日が祝日の場合は、翌火曜)

入館料：一般500円(400円)／大学生・高校生300円(240円)

※中学生以下及び静岡市在住の70才以上の方は無料 ※()は20名以上の団体料金 ※身体障害手帳等をご持参の方及び介助者は無料

主催：静岡市東海道広重美術館 (指定管理者:NPO法人 ヘキサプロジェクト)

協力： JAPAN AIRLINES



静岡市東海道広重美術館
SHIZUOKA TOKAIDO HIROSHIGE MUSEUM OF ART

〒421-3103 静岡県静岡市清水区由比297-1

Tel 054-375-4454 / Fax 054-375-5321

[URL] www.tokaido-hiroshige.jp

[facebook] www.facebook.com/tokaido.hiroshige

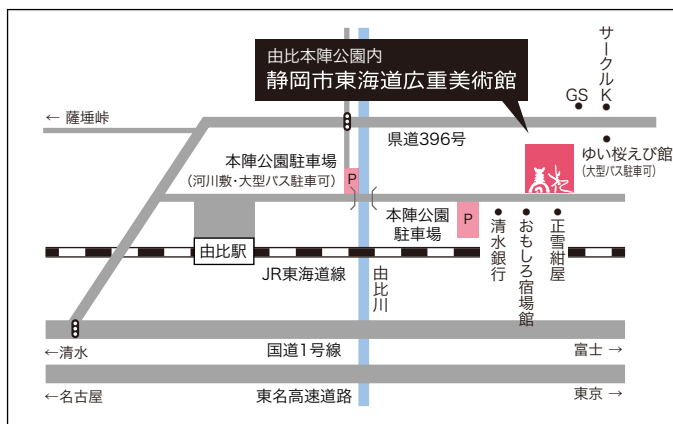
〈電車をご利用の場合〉

JR東海道本線「由比」駅下車後 徒歩25分、タクシー5分

〈お車をご利用の場合〉

美術館駐車場 21台(由比本陣公園駐車場)

東名高速清水ICから国道1号経由約20分



本展覧会及びプレスリリースに関するお問い合わせ

静岡市東海道広重美術館 担当:山口 Tel 054-375-4454 / Fax 054-375-5321 pr@tokaido-hiroshige.jp

第2回企画展 富士山世界文化遺産登録記念企画 『ドキュメンタリー富士』

広報用画像データ申込書

東海道広重美術館 広報担当 行

Fax. 054-375-5321 E-mail. pr@tokado-hiroshige.jp

■ご希望の作品番号にチェックをつけてください

1. 展覧会ポスターイメージ
2. 歌川広重 『富士三十六景 駿河薩夕之海上』
3. クリス・スティール＝パーキンス 『富士40景』

貴社名:

媒体名:

ご担当者名:

TEL :

FAX :

E-mail :

画像到着希望日： 月 日 時頃 ※ 指定可能時間 10:00～16:00

掲載予定日(コーナー名)： 月 日

<使用条件>

- ※作品写真の使用目的は、本展のご紹介のみとさせていただきます。なお、本展覧会終了後の使用はできませんのでご了承ください。
- ※ご使用の際には、画像のトリミングや、別の画像との合成、文字乗せ等をご遠慮ください。
- ※各画像のキャプション及びクレジットを明記の上、ご使用ください。
- ※ご使用の際には、お手数ですが校正紙をEメール添付にて担当までお送り下さい。
- ※弊館での広報実績資料とさせていただきますため、後日、掲載誌(紙)、URL、番組収録のDVD、CDなどお送りいただければ幸いです。

本プログラムをご紹介いただく際は、ご連絡をお願いいたします。

担当/山口 Tel 054-375-4454 / Fax 054-375-5321 pr@tokaido-hiroshige.jp